

萱嶋先生との思い出

持 留 浩 二

男同士の人間関係というのは常にどこか対等なところがあり、相手を潜在的な競争相手と見ているところがあるように思う。それが父と子であっても、師と弟子という関係であっても。私自身も今は亡き自分の父をそのように見てきたし、多くの先生方、同世代の友人、さらには自らの学生をそのように見ているような気がする。

ところがそのような潜在的な競争相手でありながら、絶対に自分にはかなわないだろうと確信し、ただただ感服するしかない相手に出会うこともある。それは認めたくない事実ではあるが、そういう相手を実際目の前にしてしまうと認めないわけにもいかない。それは自分にとっては一種の敗北宣言ではあるが、そんな偉大な人に出会えたという喜びはその敗北感を補って余りある大きなものである。

萱嶋八郎先生は私にとってそのような偉大な先生の一人である。今なお正直に言わせていただくが、私が今後どんなに努力しても萱嶋先生の持つておられる深い学識に到達することは不可能であろう。その思いは、私が大学院に入り初めて先生の講義を受けたときから今に至るまで決して変わることはなかったし、これからも変わらないと思う。

私が佛教大学大学院の修士課程に入った時、萱嶋先生は前任校の武庫川女子大学から佛教大学に転任されてこられた。赴任してすぐに先生は私の修士論文の指導教授を引き受けてくださった。当時私は心理学に興味があり、特にユング心理学的に文学作品を解釈するという研究手法をとっていたのであるが、先生はそんな私の研究への熱意を全てありのままに受けとめてくださった。私が必死で学んできた少々専門的な内容に関しても先生は全てご存知のようで、私

の質問に対していつもの確なアドバイスをしてくださった。それは深い学識を持っておられる先生だからこそ可能なことであったように思う。

萱嶋先生はアメリカの女流詩人エミリ・ディキンソンの研究で著書や論文等素晴らしい研究業績を残されておられるが、別にその研究ばかりをされてこられたわけではない。アメリカの作家全般について広く深く研究されておられ、哲学や心理学の内容も絡んでくる文学批評理論についても熟知されておられ、宗教、特にキリスト教については計り知れないほどの膨大な知識を持っておられる。

そんな萱嶋先生であるが、いつもにこやかな表情をされておられ、偉そうにされることは一度たりともなかった。そういう謙虚な先生の姿から、学者として私自身のあるべき姿についても学ばせていただいたと思う。これほど偉大な先生が謙虚にされておられるのに、私ほどの人間が偉そうにできるわけがない。今思うと、先生のそのような素晴らしい謙虚な態度は、キリスト教の教えとともに先生の持っておられる深い学識から来ているのかもしれない。何かを学ぼうとすればするほど我々は自分の限界や無知に気づかされてしまうものであるが、そうすると人は謙虚にならざるをえないのであろう。

萱嶋先生と話をしているときの私の密かな楽しみの一つは、先生にできるだけいろんな方面からの質問をして先生が持っておられる知識に少しでも触れることであった。書物等から得る知識は確かに貴重なものであるが、一人の人間が長年の歳月を経て徐々に消化してきた知識の価値はそれよりはるかに大きい。先生の話聞きながら私は最も貴重な知識のエッセンスに触れている気がしたものだ。今でも時々講義で話をしているときに、先生から聞き出した知識をそのまま自分の学生に向かって話している自分に気づくことがある。そんな時、学生時代のあの頃、先生の話に真剣に耳を傾けていた頃を懐かしく思い出す。

嘱託教授として最後の年の秋、研究室を引き払う際に、萱嶋先生はそれまで集めてこられた数々の貴重な研究書を大量に私に分けてくださった。それは今私の研究室の一画に置かれている。それらの本を受け継いだとき、まるで学者としての先生の一部を自分の一部として受け継いだような気になり大いに誇らしく感じたものだ。それ以来自分の研究室に入るたびに毎日それらの本を目に

しているのだが、その度にまるで萱嶋先生が温かい目で見守ってくれているような気がする。そして、「学者としての本道から外れることなく価値ある研究に限られた時間を使いなさい」と語りかけてくれているような気がする。